

学校カラーは何によって生じるのか  
～同志社系列4高校の比較より～

卒業論文

2009年12月23日

指導教員

立木 茂雄

同志社大学社会学部社会学科

19061018

伊藤 彩華

- 1 はじめに
- 2 文化とは
  - 2-2 メンタル・ソフトウェア
  - 2-2 文化の表出のレベル
- 3 ホフステードの抽出した指標
  - 3-1 権力格差指標
  - 3-2 個人主義指標
  - 3-3 ジェンダー指標
- 4 調査について
  - 4-1 調査概要
  - 4-2 調査対象
  - 4-3 調査方法
  - 4-4 調査仮説
- 5 仮説検証
- 6 考察

## 1 はじめに

現在、日本ではほぼ全ての人が教育を受けている。義務教育は小学校・中学校までだが、その後も高等学校・大学へ進む人も大勢いる。このように、ほぼ全ての人が人生のうちの何年間かを学校という場所で過ごす。学校では他の生徒、教師との触れ合い、様々な社会性を身につけていく。またそういった生活のなかで、当然他校の人間と触れ合う機会も生じてくる。卒業して新たな進路を歩み始めた時、転入した時、進学塾に通い始めた時などだ。その時に、自分の学校の人間との違いに気付かされた人は少なくないのではないだろうか。

私自身、今まで多々その違いを感じた経験がある。なかでももっとも印象に残っているのは、高校に入学した時のことだ。公立中学校に通っていた私は、受験をして私立同志社高等学校に入学した。同志社は中高一貫校なので、既に友人関係が成立している中に高校から途中で入学することに大きな不安を抱いていた。そこで、少しでも不安を和らげるために、同志社高校に通う知り合いの先輩に話を聞いたことがある。その時、「みんな本当に良い人ばかりで、いじめなんてないから大丈夫」と言われたのだが、当時の私には学校でいじめが存在しないなど信じがたいことだった。私の通っていた中学校では、男女問わずいじめが日常的に起きており、暴力事件も珍しくはなかった。いじめを理由に学校を休む生徒もおり、自分がいじめの対象にならないようにと常に緊張した状態だった。そのため「いじめなんてない」などという言葉に到底信じることはできず、結局入学するその日まで不安は増すばかりだった。

ところがいざ入学してみると、先輩の言葉が真実だったということを感じ知らされるのである。クラスメイトの関係はいたって良好で、いじめなど身近に経験したことがないという友人がほとんどだった。また生徒同士だけではなく教師と生徒間関係も、私が中学で経験したものとは比べ物にならないくらい友好的であり、学校全体に温和な空気が流れていた。

私が中学から高校へ進学した時に感じたこの違いは、一体何なのだろうか。学校が違えば、こんなにも差が生じるのだろうか。またこの違いは、何が原因で生じるのだろうか。この疑問を解消すべく、本稿では学校間における生徒の関係性・考え方・行動様式などの文化の違いを明らかにしていきたい。

## 2 文化とは

### 2-1 メンタル・ソフトウェア

ヘールト・ホフステード（1995）によると、すべての人は、どのように考え、感じ、行動するかについて、その人に固有のパターンを備えている。この考え方、感じ方、行動の仕方のパターンをメンタル・ソフトウェアと呼ぶ。それぞれの人のメンタル・ソフトウェアの源は、その人が成長し、人生経験を重ねてきた社会環境のなかにある。ソフトウェアの組み込みは家庭のなかではじまって、近隣、学校、若者の仲間集団、職場や地域でも続けられる。人は一生を通して、パターンを学び続けているが、その多くは、学んだり、適応したりすることがもっとも容易な幼年時代に身につけたものである。考え方、感じ方、行動の仕方について何らかのパターンをいったん身につけてしまうと、それと違ったパターンを覚えるのは非常に難しい。

メンタル・ソフトウェアは一般には、文化と呼ばれている。文化とは二つの要素から成り立っており、一つ目は「狭い意味の文化」である。たいていの西洋の言語では「文明」または「精神の洗練」を意味し、とくに、教養や芸術や文学のように洗練された精神によって生み出されるものを意味する。しかし二つ目のメンタル・ソフトウェアとしての文化は、社会人類学者たちが対象としているようなもっと広い意味を持っており、考え方、感じ方、行動の仕方のパターンを総称するものである。精神を洗練するための活動だけではなく、あいさつ、食事、感情の表し方や抑え方、他人との距離の取り方、愛し方、身づくろいの仕方など、日常的な些細な活動もここに含まれる。これは、常に集合的な現象である。同じ社会環境のなかで生きている人々あるいは生きてきた人々は、その環境のもとで文化を学習しているので、少なくとも部分的には同じ文化を共有しているからである。文化は、集合的に人間の心に組み込まれるものであり、集団によってあるいはカテゴリーによってそのソフトウェアは異なっている。

### 2-2 文化の表出のレベル

文化の違いはいくつかの形を通して現れる。図 1 に示すようにたまねぎ型のモデルとして表すことができ、シンボル、ヒーロー、儀礼、価値観の 4 つの概念から成り立っている。

以下、一つずつ説明していく。

シンボルとは、同じ文化を共有している人々だけが理解できる、特別な意味を持つ言葉、しぐさ、図あるいは物である。新しいシンボルは簡単に生み出され、ほかの文化集団によってシンボルがコピーされることも頻繁に起こる。そのためシンボルは、文化のもっとも表層に位置している。ヒーローとは、その文化で非常に高く評価される特徴を備えていて、人々の行動のモデルとされる人物である。現在生きている人物である場合も故人である場合もあり、実在の人物である場合も架空の人物である場合もある。おとぎ話や漫画の主人公の場合もある。アメリカのバットマン、日本のウルトラマンなどもそれぞれの文化のヒーローとして扱われている。現在のようなテレビ時代には、ヒーローの条件として以前よりも外見が重視されるようになっている。儀礼とは、人々が集団で行うものであるが、望ましい目的に到達するための手段としては、何の役にも立たないものである。しかし、その文化圏の人々にとっては、社会的になくなくてはならないものであるとみなされている。つまり、何かの役に立つというより、儀礼は儀礼自体のために行われるのである。あいさつの仕方や尊敬の表し方、社会的儀礼や宗教的儀礼がその一例である。価値観とは、文化のもっとも中枢にある。ある状態のほうが他の状態よりも好ましいと思う傾向であり、肯定的な側面と否定的な側面の両極を併せ持つ感情である。また、子どもたちが真っ先に学ぶ事柄の一つであり、発達心理学者によると、たいていの子供は 10 歳までに基本的な価値体系をしっかりと身につける。いったん価値体系が出来上がると、その後で変更を加えることは難しい。このように価値観は私たちの人生のきわめて早い時期に形成されるので、私たちは意識しないままに多くの価値観を内面化しているのである。

ホフステードは 1974 年に、世界 50 カ国と 3 つの地域における人々の価値観に関して、大規模な調査を行った。調査対象者は、巨大な多国籍企業 IBM の各国の支社で働く人々である。この調査において、国によって異なる文化の次元が発見されたので、それについて次章で説明する。

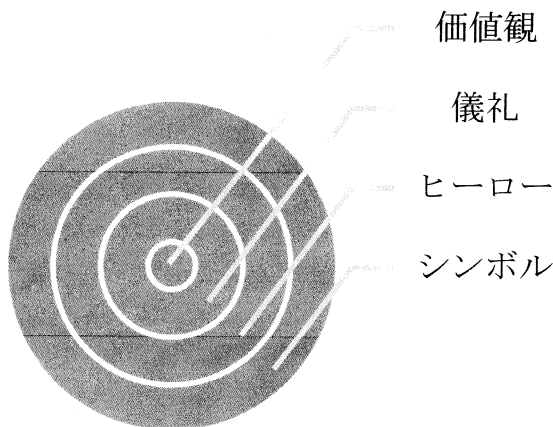


図 1 文化の表出のレベル

### 3 ホフステードの抽出した指標

#### 3-1 権力格差指標

ホフステードは、国によって不平等への対応の仕方が異なるという点を発見した。IBM 研究では、人々の間に不平等が存在するという事実にどのように対応するかについてたずねている。権力格差指標を作成するために用いられた調査項目は、次の3つである。

- ①社員が管理職に反対を表明することをしり込みすることは、あなたの経験から考えてどのくらい起こっていると思うか、という質問に対する回答
- ②上司が実際に行っている意思決定のスタイルについての部下のとらえ方
- ③上司の意思決定のスタイルとして部下が好ましいと思っているスタイル

このようにして構成された権力格差指標のスコアは、各国の相対的な位置を表している。つまり、各国の間の差異を測定しているのである。算出されたスコアによると、ラテン系諸国とアジア、アフリカ諸国において権力格差の値が高く、一方、アメリカ、イギリスと旧イギリス連邦ならびにラテン系以外の他のヨーロッパ諸国の値は低いことが示されている。

この調査で、「権力格差とは、それぞれの国の制度や組織において、権力の弱い成員が、権力が不平等に分布している状態を予期し、受け入れている程度」であるとホフステードは定義している。権力格差指標のスコアは、その国における依存関係に関する情報を与え

てくれる。権力格差の小さい国では、部下は上司に一方向的に依存するのではなく、上司から相談されることを好んでいる。つまり部下と上司は、相互依存関係にある。一方、権力格差の大きい国では、部下は上司にかなり依存している。部下の反応は、そのような依存関係を好むか、完全に拒否するか（反依存）のどちらかである。

すべての人間は、生まれた直後から、成長過程で出会う周りの年長者を手本にすることによって、メンタル・ソフトウェアを獲得し始める。権力格差の大きい状況のもとでは、子どもたちは両親に従順であることを期待されている。場合によっては、子どもたちの間にも権威の序列があって、年下の子どもは年上の子どもに従うことが期待されている。両親と年長者を尊敬することは、基本的な美德であるとみなされている。子供が自立した行動をとることは、良しとされていない。両親と年上の親族を敬うことは成人した後も続く。年長者に依存するというパターンは、あらゆる人間関係に及んでいる。また人々が身につけているメンタル・ソフトウェアには、依存したいという欲求が含まれている。権力格差の小さい状況のもとでは、子どもたちは自分で行動できるようになるとすぐに、多かれ少なかれ平等に扱われる。子どもが自分で積極的に実践を試みることが奨励されている。子どもは、親に反対意見を述べてよい。他者との関係は、他者の地位に左右されないので、型どおりの尊敬や敬意が払われることはほとんどない。子どもが成長すると、子どもと親の関係は対等な関係に代わる。家族の中には、個人の自立という理想がある。自立への欲求は、成人のメンタル・ソフトウェアを構成する主要な要素であると考えられる。

権力格差の違いは家庭から始まり、その後の学校生活においても強化されてゆく。学校においてしてみると、権力格差の大きい状況のもとでは、生徒の内面にすでに依存したいという欲求が確立しており、教師と生徒の間の不平等な関係においてもその欲求が満たされる。教師は敬意をもって接する存在である。教育のプロセスは教師中心であり、生徒が従うべき勉学の道筋の輪郭を描く。教室には厳しい秩序があり、教師がすべてのコミュニケーションの主導権を握るべきであるとされている。生徒たちは教室で求められた時にだけ発言する。子どもがあるまじき行いをすると、教師は親を巻き込んで、親が子どもの行動を正すように協力してくれることを期待する。このようなシステムでは、学習の質は事実上、教師の優秀さにもっぱら左右される。一方、権力格差の小さい状況のもとでは、教師は生徒を基本的に平等な存在として扱うものと考えられており、教師も生徒から平等な存在として扱われることを期待している。生徒の自発性に高い価値が置かれ、自分自身で勉学の道筋を見つけるように期待されている。生徒たちは、自発的に授業に割り込み、教

師と議論するし、教師に反論したり、批判したりする。このようなシステムでは、学習の質は、かなりの程度、生徒の優秀さによって決定される。

### 3-2 個人主義指標

文化によって、「個人の役割」「集団の役割」に対する認識の違いが存在する。IBM 研究においては、仕事の目標に関する調査項目を基に、個人主義指標の算出を行った。「あなたの理想とする仕事にとって重要な条件は何でしょうか？次にあげる条件をどのくらい重視しますか？」とたずねた後、14の項目が続く。結果を分析したところ、次のような項目を重視した回答と強い関連があった。個人主義の極では、個人の時間（自分や家族の生活に振り向ける時間的余裕が十分にある）、自由（かなり自由に自分の考えで仕事ができる）、やりがい（やりがいがあり達成感の得られる仕事である）を重視する傾向がある。反対の集団主義の極では、訓練（技能向上や新技術習得のための機会が多い）、作業環境（風通しがよく、照明が十分で作業空間が適当であるなど）、技能の発揮（自分の技術や能力を十分に発揮できる）という項目を重視する傾向があった。個人の時間、自由、やりがいという項目はすべて、社員が組織から自立することを強調しており、個人主義と関係している。それと対極の位置にある、訓練、作業環境、技能の発揮に関する仕事の目標は、組織が社員に提供する事柄である。つまり、組織に対する社員の依存性を強調しているのであって、集団主義と一致する。

ホフステードの定義によると、「個人主義を特徴とする社会では、個人と個人の結びつきは緩やかである。人はそれぞれ、自分自身と肉親の面倒を見ればよい。集団主義を特徴とする社会では、人は生まれた時から、メンバー同士の結びつきの強い内集団に統合される。内集団に忠誠を誓う限り、人はその内集団から生涯にわたって保護される。」となっている。世界の大多数の人々は、集団の利害が個人の利害よりも優先される「集団主義社会」で生活している。集団主義的な社会ではたいていの場合、子どもたちは、両親と兄弟姉妹だけではなく、祖父母、おじ、おば、召使い、その他の同居人などが生活を共にしている大家族で育つ。成長するにつれて、自分が「われわれ」の集団の一員であると考えようになる。「われわれ」の集団は、自らのアイデンティティの主な源であり、人生の荒波の防波堤である。人は生涯にわたり自分の内集団に忠誠を誓い、この忠誠を破ることは人にとって最悪の行為である。常に調和が保たれねばならず、直接対決は避けられる。面子が重要



な概念とされており、不法行為を犯すことは、本人とその内集団にとって恥であり面子を失うことである。個人と内集団には、現実的にも心理的にも依存関係が形成されていく。個人主義社会では、個人の利害が集団の利害よりも優先される。子どもたちはたいていの場合、両親からなる核家族に誕生する。成長するにつれて、子どもたちは自分のことを「私」と考えるようになる。この「私」は、個人としてのアイデンティティであって、他の人々の「私」とは区別される。またほかの人々も、どの集団に属しているかではなく個人の特徴に基づいて分類される。子どもは、自立できるようになればすぐに親元を離れていく。自分の心の内を語ることが美德とされている。不法行為を犯すことは、罪の意識をかき立て、自尊心を傷つけることである。このタイプの社会では、現実的にも心理的にも集団に頼ることはないであろう。

学校においても、個人と集団の関係に違いが生じている。集団主義的な文化では、教師がいなければ生徒は大きな集団で発言することをためらう。調和と面子の維持という美德が絶大な価値を持っており、意見の対立や争い事は避けなければならない。教師は常に、生徒を内集団の一部として扱っており、決して単独の個人としては扱わない。教育の目的は、社会に参加するために物事を行う具体的な方法を学習することである。卒業証書を得ることは、社会的に認知され、本人とその内集団にとって名誉なことである。一方、個人主義的な文化では、教室で生徒に発言させることを望ましいとしている。生徒は自分の出自にかかわらず個人として公平に扱われることを期待している。意見の対立があることや争いごとを皆で議論することは、もっぱら健全な状態と考えられている。教育の目的は学習の仕方を知ることであり、卒業証書はそれを修得した人の経済力を高めるばかりではなく、自尊心をも高めてくれる。

### 3-3 ジェンダー指標

男女の生物学的差異は世界中で共通しているが、男女の社会的役割のなかで、生物学的条件によって決定されているのは、ほんの一部分にすぎない。どの社会も、生殖に直接関しない多くの行動を女性にふさわしい行動とか、男性にふさわしい行動とみなしている。この、社会的文化的に規定された役割に対して、「男性らしさ」、「女性らしさ」という言葉を用いることとする。しかし、どの行動がどちらの性にふさわしい行動であるかは、社会によって異なっている。性別役割に関して、ほとんどの社会は共通の傾向を持っている。

IBM 研究では、男性らしさ、女性らしさを計るために、3-2 と同じ「あなたの理想とする仕事にとって、重要であると考えられる条件は何でしょうか。」という質問に対する回答の分析を行った。男性らしさの極では、給与（高い給与を得る機会がある）、承認（良い仕事をした時、十分に認められる）、昇進（昇進の機会がある）、やりがい（やりがいがあり、達成感の得られる仕事である）という項目を重視する傾向がある。反対に女性らしさの極では、上司（仕事の上で、直属の上司と良い関係が持てる）、協力（お互いにうまく協力し合える人と一緒に働く）、居住地（自分と家族にとって望ましい地域に住む）、雇用の保障（希望する限りその会社に勤務することができる）という項目を重視する傾向がみられた。給与と昇進を重視することは、自己主張と競争という男性的な社会的役割に対応する。また上司との関係や仕事仲間との関係の重要性は、配慮や社会環境志向の高い女性的な役割に対応している。

したがってホフステードは、男性らしさと女性らしさを次のように定義している。「男性らしさを特徴とする社会では、社会生活上で男女の性別役割がはっきりと分かれている。男性は自己主張が強くたくましく、物質的な成功を目指すものだと考えられており、女性は男性より謙虚でやさしく、生活の質に関心を払うものだと考えられている。女性らしさを特徴とする社会では、社会生活上で男女の性別役割が重なり合っている。男性も女性も謙虚でやさしく、生活の質に関心を払うものだと考えられている。」男性らしさ—女性らしさの尺度における社会の位置は、その国で一般的にみられる夫と妻の役割分担を反映していると言える。

学校においてしてみると、男性らしさの強い文化では、一番よくできる学生であることが規範になっている。親は、自分の子供が一番よくできる生徒と対等に競うことを期待している。生徒は教室で目立とうとし、お互いに公然と競争する。学校で失敗することは致命的であり、日本やドイツのような男性らしさの強い国では、試験に失敗して自殺した生徒の記事が毎年のように報道されている。教師には才能と学問的名声が求められ、生徒は学業成績によって評価される。また男女では学習する教科が異なる。一方の女性らしさの強い文化では、平均的な生徒であることが規範となっている。クラスで一番よくできる生徒はどこかこっけいな存在である。野心がなく控えめであり、自己主張の激しい行動や他の者より勝ろうとする努力は、すぐにひやかされてしまう。生徒は熱心すぎるとみられないようにし、お互いに団結することが目標とされている。学校での失敗は比較的ささいなことである。教師には親しみやすさや社交性を求め、生徒の評価においては社会的な適応

力が重要となる。また男の子も女の子も、同じ科目を勉強する。

## 4 調査について

### 4-1 調査概要

今回の調査は、学校間のカラーや文化の違いを明らかにすることを目的として行った。私は日頃から同志社大学に通うなかで、同志社系列の4高校から進学した学生のカラーの違いを感じていた。同じ同志社系列でありながらカラーの違いが生じる点に興味を持ち、この4高校出身者を対象に調査を行うことにした。また、学部によっても学生のカラーが異なるという点を考慮し、今回は、自分と同じ社会学部に在籍している内部校出身者を対象として調査を行った。

### 4-2 調査対象について

同志社大学には、同志社系列4高校から進学した学生と、そのほか外部から入学した学生が通っている。社会学部の場合は、全体の学生数のおよそ20%が内部進学生で構成されている。次に4つの内部校について、一つずつみていきたい。

同志社高校は1875年に同志社英学校として開校され、同志社系列のなかでもっとも長い歴史を持つ。男女共学で、自由、自治、自立を尊ぶ校風である。緑豊かな岩倉キャンパスの環境のなかで、勉学、部活動、学園祭などを両立させて充実した高校生活を送ることができる。

同志社女子高校は、1876年に女子塾として開設されたものである。キリスト教人生観を身につけた女性、社会の各方面で能力に応じて奉仕する女性を育成する。各種の学校行事が女子生徒のみによって企画、運営されているので、自主的で主体的な女性を育む環境が整っている。

同志社香里高校は、同志社と香里学園の合併により1951年に開校された。開校当初は男子校だったが、2000年からは男女共学となっている。自主性と個性を大切にした教育を行い、33あるクラブ活動も盛んである。次々と斬新な計画を実行に移し、新しい時代の学校づくりに取り組んでいる。

同志社国際高校は、1980年に開校された男女共学校である。全校生徒のうち3分の2が海外で生活した経験のある帰国生徒である。海外帰国生徒と国内一般生徒が共に学び、高め合うことによって、確かな自己を作るとともに、一人ひとりがかけがえのない存在であることを認め合う教育を行っている。

#### 4-3 調査方法

できるだけ多くのデータを集めて分析を行うために、アンケート調査を行った。ホフステードの指標を参考にして質問紙を作成し、学科、年齢を問わず、社会学部に在籍している内部生を対象としてデータを収集した。まずは自分の友人の内部生に調査に協力してもらい、その友人の知り合いの内部生をさらに紹介してもらおうという形で進めていった。この場合はパソコン宛てに質問紙のファイルを送信させてもらい、回答を得た。また社会学部の講義にも顔を出し、受講生に声を掛けて内部生を探し、アンケートに協力してもらった。

#### 4-4 調査仮説

まずは各校のカラーの違いを明確にした。カラーの違いといっても漠然としか感じたことがなかったので、具体的にイメージする作業を行った。内部校出身者に協力してもらい、それぞれの学校に対して抱いているイメージを自由に発言してもらった。このイメージを基に、ホフステードの3つの指標について4高校の順位付けを行った。権力格差指標の大きい順に、同志社女子高校、同志社香里高校、同志社高校、同志社国際高校。個人主義指標の高い順に、同志社国際高校、同志社香里高校、同志社高校、同志社女子高校。そして女性らしい社会から男性らしい社会の順に、同志社国際高校、同志社高校、同志社香里高校、同志社女子高校と続く。あくまでイメージによる推論ではあるが、これを本調査の仮説と位置付け、以降検証する作業へと入っていく。

同志社高校	同志社女子高校	同志社香里高校	同志社国際高校
ノーマル	たくましい	少年っぽい	派手
可もなく不可もない	男勝りな人が多い	スポーツ熱心	ノリが独特
おとなしい	精神的に強い	お坊ちゃまが多い	インターナショナル
保守的	要領が良い	お金持ち	ボディタッチをよくする
インテリなイメージ	群れを大切にす	カリスマ性	現代的な遊びをしている
賢そう	お嬢様が多い	自由な人、変な人が多い	物事をはっきり言う
個性豊か	華やか	地元が好き	大胆な人が多い
	個性的	仲間内でつるんでいる	何をするにも本格的
		要領よく生きている	個性的

表 1 4 高校に対するイメージ

権力格差大	同志社女子	個人主義的	同志社国際	女性らしい	同志社国際
↑	同志社香里	↑	同志社香里	↑	同志社
↓	同志社	↓	同志社	↓	同志社香里
権力格差小	同志社国際	集団主義的	同志社女子	男性らしい	同志社女子

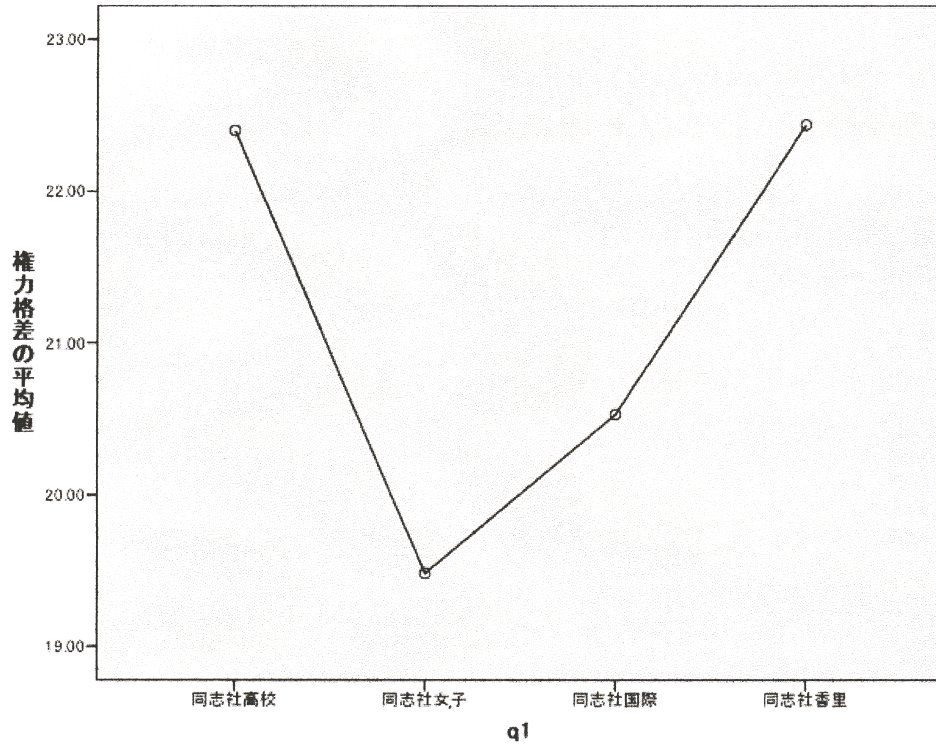
表 2 4 高校の順位付け

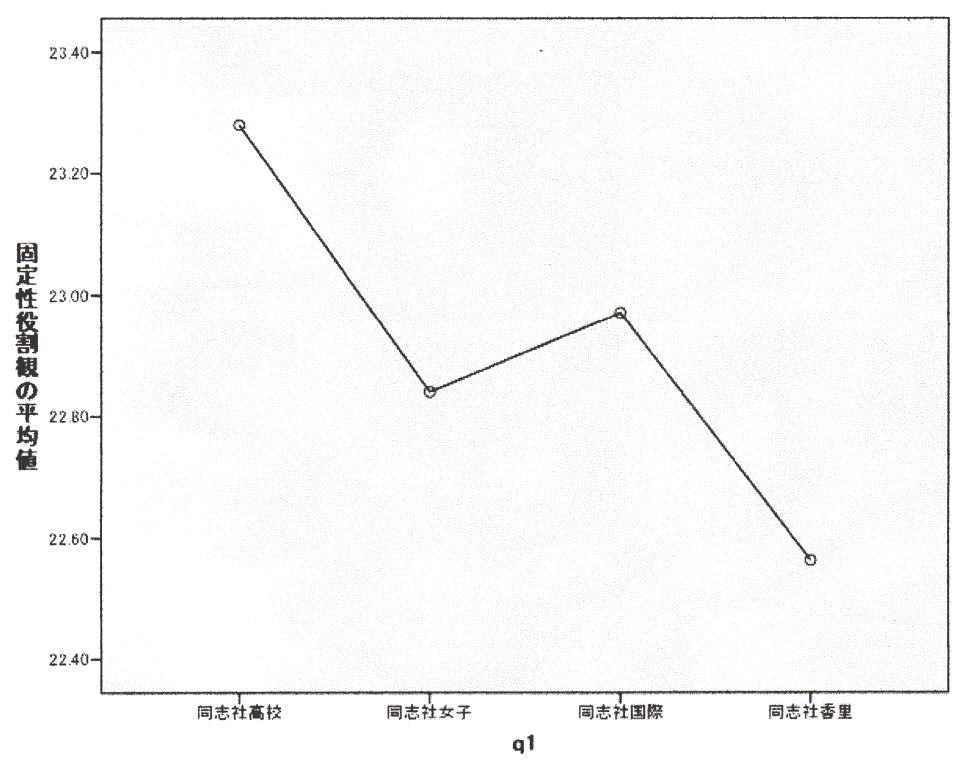
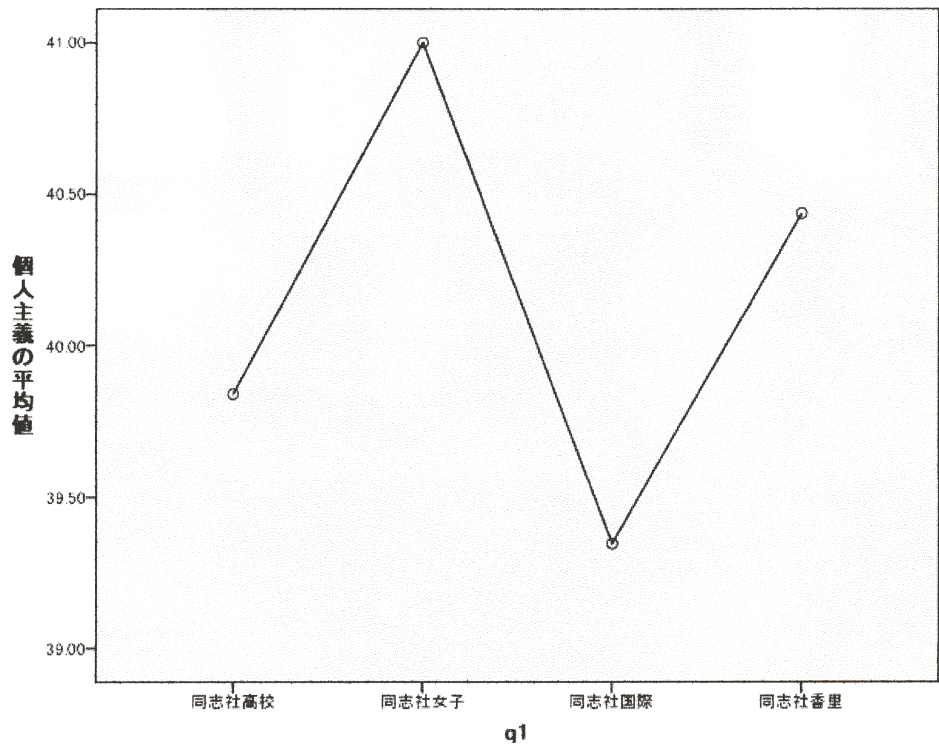
## 5 仮説の検証

### 分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
権力格差	グループ間	141.852	3	47.284	2.179	.097
	グループ内	1714.413	79	21.701		
	合計	1856.265	82			
個人主義	グループ間	32.509	3	10.836	.358	.783
	グループ内	2390.460	79	30.259		
	合計	2422.969	82			

固定性役割観	グループ間	5.433	3	1.811	.103	.958
	グループ内	1384.573	79	17.526		
	合計	1390.006	82			





以下、一つずつ説明していく。

シンボルとは、同じ文化を共有している人々だけが理解できる、特別な意味を持つ言葉、しぐさ、図あるいは物である。新しいシンボルは簡単に生み出され、ほかの文化集団によってシンボルがコピーされることも頻繁に起こる。そのためシンボルは、文化のもっとも表層に位置している。ヒーローとは、その文化で非常に高く評価される特徴を備えていて、人々の行動のモデルとされる人物である。現在生きている人物である場合も故人である場合もあり、実在の人物である場合も架空の人物である場合もある。おとぎ話や漫画の主人公の場合もある。アメリカのバットマン、日本のウルトラマンなどもそれぞれの文化のヒーローとして扱われている。現在のようなテレビ時代には、ヒーローの条件として以前よりも外見が重視されるようになっている。儀礼とは、人々が集団で行うものであるが、望ましい目的に到達するための手段としては、何の役にも立たないものである。しかし、その文化圏の人々にとっては、社会的になくなくてはならないものであるとみなされている。つまり、何かの役に立つというより、儀礼は儀礼自体のために行われるのである。あいさつの仕方や尊敬の表し方、社会的儀礼や宗教的儀礼がその一例である。価値観とは、文化のもっとも中枢にある。ある状態のほうが他の状態よりも好ましいと思う傾向であり、肯定的な側面と否定的な側面の両極を併せ持つ感情である。また、子どもたちが真っ先に学ぶ事柄の一つであり、発達心理学者によると、たいていの子供は 10 歳までに基本的な価値体系をしっかりと身につける。いったん価値体系が出来上がると、その後で変更を加えることは難しい。このように価値観は私たちの人生のきわめて早い時期に形成されるので、私たちは意識しないままに多くの価値観を内面化しているのである。

ホフステードは 1974 年に、世界 50 カ国と 3 つの地域における人々の価値観に関して、大規模な調査を行った。調査対象者は、巨大な多国籍企業 IBM の各国の支社で働く人々である。この調査において、国によって異なる文化の次元が発見されたので、それについて次章で説明する。



## 2 文化とは

### 2-1 メンタル・ソフトウェア

ヘールト・ホフステード（1995）によると、すべての人は、どのように考え、感じ、行動するかについて、その人に固有のパターンを備えている。この考え方、感じ方、行動の仕方のパターンをメンタル・ソフトウェアと呼ぶ。それぞれの人のメンタル・ソフトウェアの源は、その人が成長し、人生経験を重ねてきた社会環境のなかにある。ソフトウェアの組み込みは家庭のなかではじまって、近隣、学校、若者の仲間集団、職場や地域でも続けられる。人は一生を通して、パターンを学び続けているが、その多くは、学んだり、適応したりすることがもっとも容易な幼年時代に身につけたものである。考え方、感じ方、行動の仕方について何らかのパターンをいったん身につけてしまうと、それと違ったパターンを覚えるのは非常に難しい。

メンタル・ソフトウェアは一般には、文化と呼ばれている。文化とは二つの要素から成り立っており、一つ目は「狭い意味の文化」である。たいていの西洋の言語では「文明」または「精神の洗練」を意味し、とくに、教養や芸術や文学のように洗練された精神によって生み出されるものを意味する。しかし二つ目のメンタル・ソフトウェアとしての文化は、社会人類学者たちが対象としているようなもっと広い意味を持っており、考え方、感じ方、行動の仕方のパターンを総称するものである。精神を洗練するための活動だけではなく、あいさつ、食事、感情の表し方や抑え方、他人との距離の取り方、愛し方、身づくりの仕方など、日常的な些細な活動もここに含まれる。これは、常に集合的な現象である。同じ社会環境のなかで生きている人々あるいは生きてきた人々は、その環境のもとで文化を学習しているので、少なくとも部分的には同じ文化を共有しているからである。文化は、集合的に人間の心に組み込まれるものであり、集団によってあるいはカテゴリーによってそのソフトウェアは異なっている。

### 2-2 文化の表出のレベル

文化の違いはいくつかの形を通して現れる。図1に示すようにたまねぎ型のモデルとして表すことができ、シンボル、ヒーロー、儀礼、価値観の4つの概念から成り立っている。

## 1 はじめに

現在、日本ではほぼ全ての人が教育を受けている。義務教育は小学校・中学校までだが、その後も高等学校・大学へ進む人も大勢いる。このように、ほぼ全ての人が人生のうちの何年間かを学校という場所で過ごす。学校では他の生徒、教師との触れ合い、様々な社会性を身につけていく。またそういった生活のなかで、当然他校の人間と触れ合う機会も生じてくる。卒業して新たな進路を歩み始めた時、転入した時、進学塾に通い始めた時などだ。その時に、自分の学校の人間との違いに気付かされた人は少なくないのではないだろうか。

私自身、今まで多々その違いを感じた経験がある。なかでももっとも印象に残っているのは、高校に入学した時のことだ。公立中学校に通っていた私は、受験をして私立同志社高等学校に入学した。同志社は中高一貫校なので、既に友人関係が成立している中に高校から途中で入学することに大きな不安を抱いていた。そこで、少しでも不安を和らげるために、同志社高校に通う知り合いの先輩に話を聞いたことがある。その時、「みんな本当に良い人ばかりで、いじめなんてないから大丈夫」と言われたのだが、当時の私には学校でいじめが存在しないなど信じがたいことだった。私の通っていた中学校では、男女問わずいじめが日常的に起きており、暴力事件も珍しくはなかった。いじめを理由に学校を休む生徒もおり、自分がいじめの対象にならないようにと常に緊張した状態だった。そのため「いじめなんてない」などという言葉に到底信じることはできず、結局入学するその日まで不安は増すばかりだった。

ところがいざ入学してみると、先輩の言葉が真実だったということを感じ知らされるのである。クラスメイトの関係はいたって良好で、いじめなど身近に経験したことがないという友人がほとんどだった。また生徒同士だけではなく教師と生徒間の関係も、私が中学で経験したものとは比べ物にならないくらい友好的であり、学校全体に温和な空気が流れていた。

私が中学から高校へ進学した時に感じたこの違いは、一体何なのだろうか。学校が違えば、こんなにも差が生じるのだろうか。またこの違いは、何が原因で生じるのだろうか。この疑問を解消すべく、本稿では学校間における生徒の関係性・考え方・行動様式などの文化の違いを明らかにしていきたい。

リサーチクエスチョンについて

\* リサーチクエスチョンを設定する上での注意点

- ①個人主義的・心理学的な質問は避けること
- ②経済的な事情に偏った質問は避けること
- ③個人・集団・役割・関係・社会・時代の間にある差異に関心のある質問をすること
- ④単に「はい」「いいえ」と答えるだけの質問は避けること
- ⑤妥当な質問が一つしかない質問は避けること
- ⑥二つ以上の概念間の関係を引き出すこと
- ⑦自分の質問に答えられるような情報を自分で手に入れること
- ⑧文字数制限内で答えられる質問にすること

文献名：高校における学校格差文化

著者名：武内 清

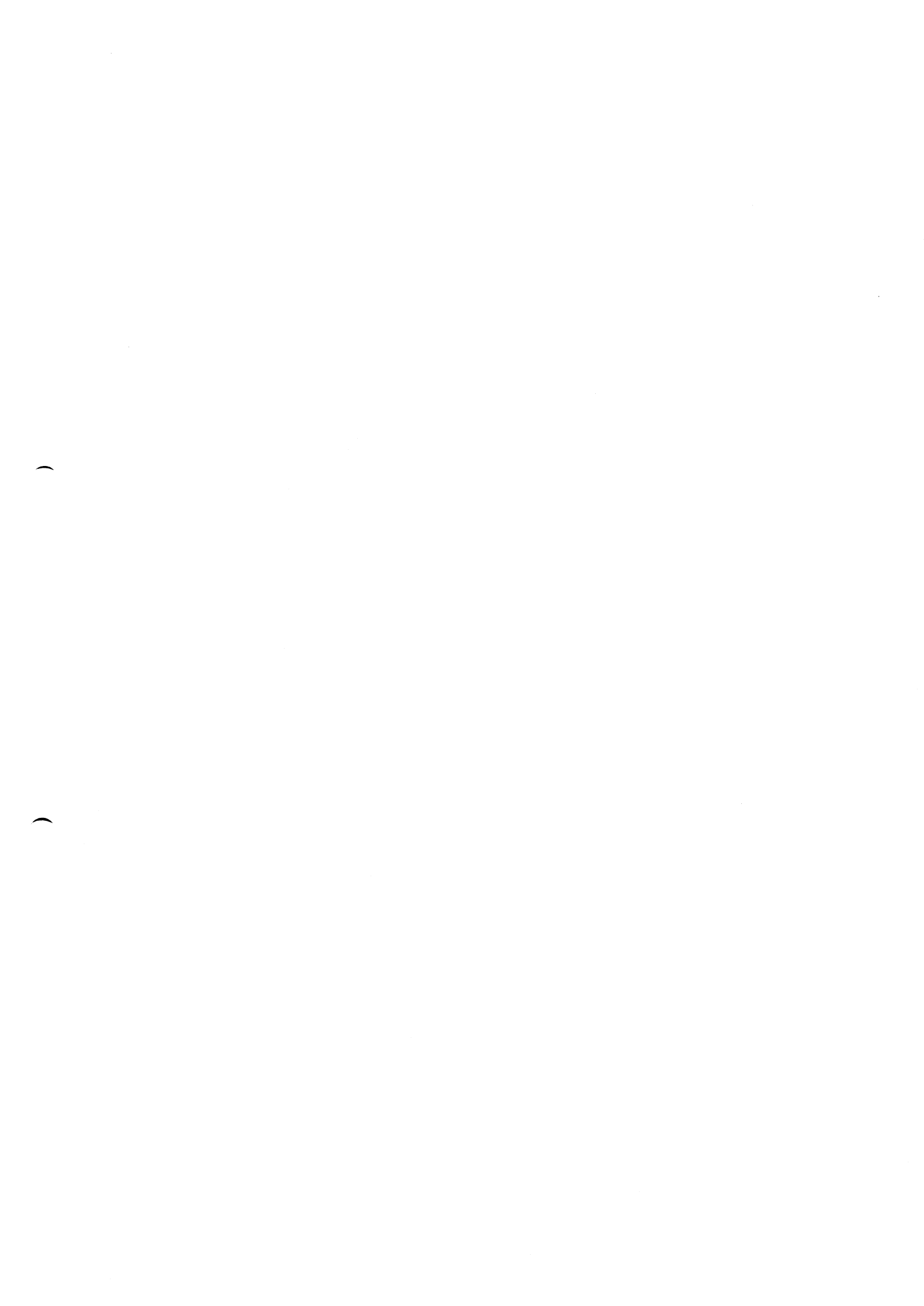
掲載雑誌：教育社会学研究第36集 p137~144

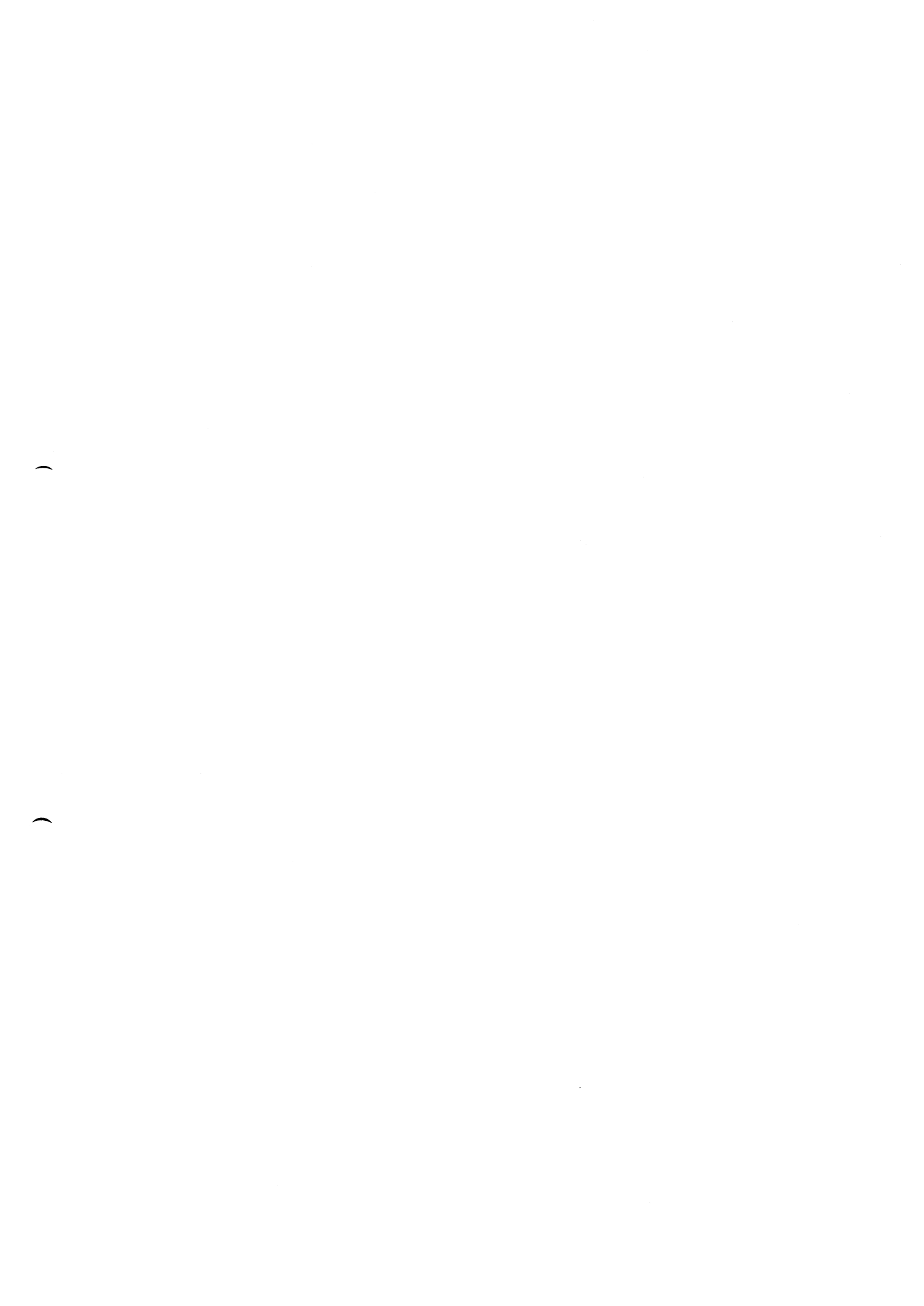
発行年：1981年

〈問い〉高校の格差にもとづいて形成される学校文化が、潜在的にどのような影響を生徒に及ぼしているか

\* リサーチクエスチョンの検証

- ①学校の雰囲気や経営方針、生徒文化という「社会」と、各生徒という「個人」の関連をテーマとしているので、社会学的と言える。
- ②学校文化と生徒との関連を調べるので、経済的ではない。
- ③学校に対応する、文化間の差異に着目している。
- ④「はい」「いいえ」と答えるだけの質問ではない。
- ⑤どのような影響を及ぼしているか、と問うている点から、答えに幅を持たせている。
- ⑥二つ以上の概念を引き出している。
- ⑦以前に実施された調査（「モノグラフ高校生調査 Vol.2」）を利用している。
- ⑧文字数制限内に収まっている。





リサーチクエスチョンについて

\*リサーチクエスチョンを設定する上での注意点

- ①個人主義的・心理学的な質問は避けること
- ②経済的な事情に偏った質問は避けること
- ③個人・集団・役割・関係・社会・時代の間にある差異に関心のある質問をすること
- ④単に「はい」「いいえ」と答えるだけの質問は避けること
- ⑤妥当な質問が一つしかない質問は避けること
- ⑥二つ以上の概念間の関係を引き出すこと
- ⑦自分の質問に答えられるような情報を自分で手に入れること
- ⑧文字数制限内で答えられる質問にすること

文献名：高校における学校格差文化

著者名：武内 清

掲載雑誌：教育社会学研究第36集 p137~144

発行年：1981年

<問い>高校の格差にもとづいて形成される学校文化が、潜在的にどのような影響を生徒に及ぼしているか

\* リサーチクエスチョンの検証

- ①学校の雰囲気や経営方針、生徒文化という「社会」と、各生徒という「個人」の関連をテーマとしているので、社会学的と言える。
- ②学校文化と生徒との関連を調べるので、経済的ではない。
- ③学校に対応する、文化間の差異に着目している。
- ④「はい」「いいえ」と答えるだけの質問ではない。
- ⑤どのような影響を及ぼしているか、と問うている点から、答えに幅を持たせている。
- ⑥二つ以上の概念を引き出している。
- ⑦以前に実施された調査（「モノグラフ高校生調査 Vol.2」）を利用している。
- ⑧文字数制限内に収まっている。

リサーチクエスチョンについて

\* リサーチクエスチョンを設定する上での注意点

- ①個人主義的・心理学的な質問は避けること
- ②経済的な事情に偏った質問は避けること
- ③個人・集団・役割・関係・社会・時代の間にある差異に関心のある質問をすること
- ④単に「はい」「いいえ」と答えるだけの質問は避けること
- ⑤妥当な質問が一つしかない質問は避けること
- ⑥二つ以上の概念間の関係を引き出すこと
- ⑦自分の質問に答えられるような情報を自分で手に入れること
- ⑧文字数制限内で答えられる質問にすること

文献名：高校における学校格差文化

著者名：武内 清

掲載雑誌：教育社会学研究第36集 p137~144

発行年：1981年

<問い>高校の格差にもとづいて形成される学校文化が、潜在的にどのような影響を生徒に及ぼしているか

\* リサーチクエスチョンの検証

- ①学校の雰囲気や経営方針、生徒文化という「社会」と、各生徒という「個人」の関連をテーマとしているので、社会学的と言える。
- ②学校文化と生徒との関連を調べるので、経済的ではない。
- ③学校に対応する、文化間の差異に着目している。
- ④「はい」「いいえ」と答えるだけの質問ではない。
- ⑤どのような影響を及ぼしているか、と問うている点から、答えに幅を持たせている。
- ⑥二つ以上の概念を引き出している。
- ⑦以前に実施された調査（「モノグラフ高校生調査 Vol.2」）を利用している。
- ⑧文字数制限内に収まっている。

リサーチクエスチョンについて

\*リサーチクエスチョンを設定する上での注意点

- ①個人主義的・心理学的な質問は避けること
- ②経済的な事情に偏った質問は避けること
- ③個人・集団・役割・関係・社会・時代の間にある差異に関心のある質問をすること
- ④単に「はい」「いいえ」と答えるだけの質問は避けること
- ⑤妥当な質問が一つしかない質問は避けること
- ⑥二つ以上の概念間の関係を引き出すこと
- ⑦自分の質問に答えられるような情報を自分で手に入れること
- ⑧文字数制限内で答えられる質問にすること

文献名：高校における学校格差文化

著者名：武内 清

掲載雑誌：教育社会学研究第36集 p137~144

発行年：1981年

<問い>高校の格差にもとづいて形成される学校文化が、潜在的にどのような影響を生徒に及ぼしているか

\* リサーチクエスチョンの検証

- ①学校の雰囲気や経営方針、生徒文化という「社会」と、各生徒という「個人」の関連をテーマとしているので、社会学的と言える。
- ②学校文化と生徒との関連を調べるので、経済的ではない。
- ③学校に対応する、文化間の差異に着目している。
- ④「はい」「いいえ」と答えるだけの質問ではない。
- ⑤どのような影響を及ぼしているか、と問うている点から、答えに幅を持たせている。
- ⑥二つ以上の概念を引き出している。
- ⑦以前に実施された調査（「モノグラフ高校生調査 Vol.2」）を利用している。
- ⑧文字数制限内に収まっている。



リサーチクエスチョンについて

\*リサーチクエスチョンを設定する上での注意点

- ①個人主義的・心理学的な質問は避けること
- ②経済的な事情に偏った質問は避けること
- ③個人・集団・役割・関係・社会・時代の間にある差異に関心のある質問をすること
- ④単に「はい」「いいえ」と答えるだけの質問は避けること
- ⑤妥当な質問が一つしかない質問は避けること
- ⑥二つ以上の概念間の関係を引き出すこと
- ⑦自分の質問に答えられるような情報を自分で手に入れること
- ⑧文字数制限内で答えられる質問にすること

文献名：高校における学校格差文化

著者名：武内 清

掲載雑誌：教育社会学研究第36集 p137~144

発行年：1981年

<問い>高校の格差にもとづいて形成される学校文化が、潜在的にどのような影響を生徒に及ぼしているか

\* リサーチクエスチョンの検証

- ①学校の雰囲気や経営方針、生徒文化という「社会」と、各生徒という「個人」の関連をテーマとしているので、社会学的と言える。
- ②学校文化と生徒との関連を調べるので、経済的ではない。
- ③学校に対応する、文化間の差異に着目している。
- ④「はい」「いいえ」と答えるだけの質問ではない。
- ⑤どのような影響を及ぼしているか、と問うている点から、答えに幅を持たせている。
- ⑥二つ以上の概念を引き出している。
- ⑦以前に実施された調査（「モノグラフ高校生調査 Vol.2」）を利用している。
- ⑧文字数制限内に収まっている。

リサーチクエスチョンについて

\*リサーチクエスチョンを設定する上での注意点

- ①個人主義的・心理学的な質問は避けること
- ②経済的な事情に偏った質問は避けること
- ③個人・集団・役割・関係・社会・時代の間にある差異に関心のある質問をすること
- ④単に「はい」「いいえ」と答えるだけの質問は避けること
- ⑤妥当な質問が一つしかない質問は避けること
- ⑥二つ以上の概念間の関係を引き出すこと
- ⑦自分の質問に答えられるような情報を自分で手に入れること
- ⑧文字数制限内で答えられる質問にすること

文献名：高校における学校格差文化

著者名：武内 清

掲載雑誌：教育社会学研究第36集 p137~144

発行年：1981年

<問い>高校の格差にもとづいて形成される学校文化が、潜在的にどのような影響を生徒に及ぼしているか

\* リサーチクエスチョンの検証

- ①学校の雰囲気や経営方針、生徒文化という「社会」と、各生徒という「個人」の関連をテーマとしているので、社会学的と言える。
- ②学校文化と生徒との関連を調べるので、経済的ではない。
- ③学校に対応する、文化間の差異に着目している。
- ④「はい」「いいえ」と答えるだけの質問ではない。
- ⑤どのような影響を及ぼしているか、と問うている点から、答えに幅を持たせている。
- ⑥二つ以上の概念を引き出している。
- ⑦以前に実施された調査（「モノグラフ高校生調査 Vol.2」）を利用している。
- ⑧文字数制限内に収まっている。

リサーチクエスチョンについて

\*リサーチクエスチョンを設定する上での注意点

- ①個人主義的・心理学的な質問は避けること
- ②経済的な事情に偏った質問は避けること
- ③個人・集団・役割・関係・社会・時代の間にある差異に関心のある質問をすること
- ④単に「はい」「いいえ」と答えるだけの質問は避けること
- ⑤妥当な質問が一つしかない質問は避けること
- ⑥二つ以上の概念間の関係を引き出すこと
- ⑦自分の質問に答えられるような情報を自分で手に入れること
- ⑧文字数制限内で答えられる質問にすること

文献名：高校における学校格差文化

著者名：武内 清

掲載雑誌：教育社会学研究第36集 p137~144

発行年：1981年

<問い>高校の格差にもとづいて形成される学校文化が、潜在的にどのような影響を生徒に及ぼしているか

\* リサーチクエスチョンの検証

- ①学校の雰囲気や経営方針、生徒文化という「社会」と、各生徒という「個人」の関連をテーマとしているので、社会学的と言える。
- ②学校文化と生徒との関連を調べるので、経済的ではない。
- ③学校に対応する、文化間の差異に着目している。
- ④「はい」「いいえ」と答えるだけの質問ではない。
- ⑤どのような影響を及ぼしているか、と問うている点から、答えに幅を持たせている。
- ⑥二つ以上の概念を引き出している。
- ⑦以前に実施された調査（「モノグラフ高校生調査 Vol.2」）を利用している。
- ⑧文字数制限内に収まっている。

伊藤 彩華

## 卒業論文のテーマについて

## (1) 中学から同志社に通う学生が良い人ばかりなのはなぜ？

私は高校から同志社に通っているのだが、入学前は、中学からの内部生の中に途中で加わることにとても不安を抱えていた。中学三年間の間に友達の輪もある程度固定化されているだろうし、そこに馴染めなかったらどうしようと考えていた。同志社に通う知人に話を聞いたところ、「みんな良い子ばかりだし、いじめもないし心配いらないよ」と言われたのだが、正直いじめがないなんてことも信じられなかった。ところが実際同志社に来てみると素直で良い子ばかりだし、いじめがないというのも事実だった。今まで自分が通ってきた小学校・中学校との雰囲気の違いに驚かされた。そこで、このようなそれぞれの学校のカラーはいかにして形成され、なぜこのような違いが生まれるのか疑問に思った。

## (2) 学校によってその後の人生が左右されるのはなぜ？

私は中学受験も高校受験も失敗しているのだが、あの時もし受験に合格していればどうなっていたらとたまに考えることがある。違う学校に通い違う友人と遊び、今とは全く違った道を歩んでいただろう。またバイト先で出会った社員さんは、同じ年にもかかわらず短大を卒業してこの春から正社員として働いている。おそらく彼女は短大という進路を選択しなければ今ここで働いていることはなかっただろう。また短大に入ったのには、高校の先生・友人や家庭環境が作用したのではないかと考えられる。このように、人間は学歴やその背景にある家庭環境から大きく影響されながら人生を歩んでいると思われる。その人の人生に影響を与える要因について興味を持った。

## (3) 高齢者に明るい未来はあるのか？

高齢化に伴い養護老人ホームは確実に増加しているが、様々な困難もある。本人が直接足を運んでひとつひとつ見て回るわけにはいかないのが、その子供が必死になって探し回ることになる。しかし入所に必要な料金はとても高額なうえに、実際入所できるまでに何年も待たされるホームも多い。入所してからも、介護の仕事は大変なのでヘルパーさんが突然辞めるという事態もある。

## (4) ケータイに依存する人としない人がいるのはなぜ？

ケータイの使い方は人によって多種多様である。一日に通もメールをしない人もいれば、二台以上持ち歩いていて常にメールか電話をしているような人もいる。現代のコミュニケーションの空間が一体どうなっているのかについて調べてみたい。

伊藤 彩華

## 卒業論文のテーマについて

## (1) 中学から同志社に通う学生が良い人ばかりなのはなぜ？

私は高校から同志社に通っているのだが、入学前は、中学からの内部生の中に途中で加わることにとても不安を抱えていた。中学三年間の間に友達の輪もある程度固定化されているだろうし、そこに馴染めなかったらどうしようと考えていた。同志社に通う知人に話を聞いたところ、「みんな良い子ばかりだし、いじめもないし心配いらないよ」と言われたのだが、正直いじめがないなんてことも信じられなかった。ところが実際同志社に来てみると素直で良い子ばかりだし、いじめがないというのも事実だった。今まで自分が通ってきた小学校・中学校との雰囲気の違いに驚かされた。そこで、このようなそれぞれの学校のカラーはいかにして形成され、なぜこのような違いが生まれるのか疑問に思った。

## (2) 学校によってその後の人生が左右されるのはなぜ？

私は中学受験も高校受験も失敗しているのだが、あの時もし受験に合格していればどうなっていたらとたまに考えることがある。違う学校に通い違う友人と遊び、今とは全く違った道を歩んでいただろう。またバイト先で出会った社員さんは、同じ年にもかかわらず短大を卒業してこの春から正社員として働いている。おそらく彼女は短大という進路を選択しなければ今ここで働いていることはなかっただろう。また短大に入ったのには、高校の先生・友人や家庭環境が作用したのではないかと考えられる。このように、人間は学歴やその背景にある家庭環境から大きく影響されながら人生を歩んでいると思われる。その人の人生に影響を与える要因について興味を持った。

## (3) 高齢者に明るい未来はあるのか？

高齢化に伴い養護老人ホームは確実に増加しているが、様々な困難もある。本人が直接足を運んでひとつひとつ見て回るわけにはいかないのが、その子供が必死になって探し回ることになる。しかし入所に必要な料金はとても高額なうえに、実際入所できるまでに何年も待たされるホームも多い。入所してからも、介護の仕事は大変なのでヘルパーさんが突然辞めるという事態もある。

## (4) ケータイに依存する人としらない人がいるのはなぜ？

ケータイの使い方は人によって多種多様である。一日に通もメールをしない人もいれば、二台以上持ち歩いていて常にメールか電話をしているような人もいる。現代のコミュニケーションの空間が一体どうなっているのかについて調べてみたい。

## 同志社系列 4 高校の比較～違いは何によって生じるのか～

『現代高校生の計量社会学―進路・生活・世代―』,尾嶋史章編著,2001,ミネルヴァ

### 《第 1 章 進路選択はどのように変わったのか》

81 年調査と 97 年調査をもとに、高校 3 年生の卒業後の進路希望、進学・就職希望と職業希望の時点間変化に注目した。

**進路希望** 男子：普通科「非進学校」男子の成績中・下位の大学進学希望率が低下した。  
女子：短大進学希望者が減少し、大学進学希望者が増加した。  
⇒女子の大学進学率上昇によって、男女の競合関係が生まれた。

**進学動機** 男子：就職前のステップとして進学を考える傾向がある。変化は小さい。  
女子：短大進学希望者や専修学校進学希望者によって、職業志向が強まった。  
大学希望者ではモラトリアム型や進学圧力型が増加した。  
⇒男女の差異が減少した。

**就職動機** 男子：成績との関係で進学を断念したり、職業的自立を目指して就業する傾向が強い。変化は小さい。  
女子：家庭の経済的拘束から進学を断念して就職する者が増える傾向にある。  
⇒家庭の経済状況が女子の進学行動への影響力を高めている。

**職業希望** 男子：長期的なものから、手堅く短期的なものへと変化した。  
女子：分散化する傾向はあるが、女性としての「細やかさ」や「忍耐力」という特性を活かす職業であり「適職」の枠から踏み出してはなかった。  
⇒ジェンダー間格差の縮小は明確ではなかった。

- ・女子の学校教育選択の変化には性別役割規範が関与している。  
近年のジェンダーをめぐるイデオロギー環境の変化は、女子の進学行動に影響したとみることができる。
- ・職業希望には、産業構造の変化や労働市場の変化、また「個性・適性」重視の教育環境が影響したことにより、自己実現的な要素を含んだ職業への変化が見られた。

### 同志社系列 4 高校の比較～違いは何によって生じるのか～

前回までの指標に、4 高校のイメージを当てはめてみた。

○権力格差大：部下が上司に依存しており、部下はこれを好むか拒否するかのどちらかである  
権力格差小：部下と上司は相互依存関係にある

○集団主義的：メンバー同士の結びつきが強い  
個人主義的：個人と個人の結びつきは緩やか

○女性らしい：社会生活の上で男女の性別役割が重なっている  
男性らしい：社会生活の上で男女の性別役割がはっきり分かれている

・権力格差大	女子	・集団主義的	女子	・女性らしい	国際
↑	香里	↑	岩倉	↑	岩倉
↓	岩倉	↓	香里	↓	香里
権力格差小	国際	個人主義的	国際	男性らしい	女子

#### ◎質問項目◎

##### 高校生活について

- ・授業や勉強に熱心だったか
- ・学内の友人との交際は活発だったか
- ・学外の友人との交際は活発だったか
- ・異性の友人との交際は活発だったか
- ・部活動に熱心だったか
- ・校則は厳しかったか
- ・校則違反をしたことがあるか
- ・学校に遅刻をしたことがあるか
- ・無断欠席をしたことがあるか
- ・教師を尊敬していたか
- ・教師は親しみやすい存在だったか
- ・教師をあだ名で呼んでいたか
- ・教師に敬語を使って話していたか
- ・教師と授業以外で話したことがあるか

- ・何か困ったことがあった時、教師に相談したことがあるか
- ・授業中、教室は騒がしくなかったか
- ・授業中、教師から意見を求められることが度々あったか
- ・授業中、他の生徒の前で意見をすることに抵抗があったか
- ・教師が優秀な生徒を褒めることが度々あったか
- ・物事は、教師主導で決められていたか、生徒主導で決められていたか
- ・物事を決める時、男女どちらが権力を握ることが多かったか
- ・友人とケンカをしたことがあるか
- ・友人と意見の対立があった時、どう解決したか
- ・友人とグループで活動することが多かったか、個人で活動することが多かったか
- ・大学進学の際、現在の学部を選んだのはなぜか

##### 家庭について

- ・親を尊敬しているか
- ・親のことを何と呼んでいるか
- ・親に対して敬語で話しているか
- ・両親のどちらが働いているか、もしくは共働きかどうか
- ・父親と母親で家庭内での役割は異なっているか
- ・家族揃って出掛けることがよくあるか
- ・家族で話し合うことがよくあるか
- ・家族で物事を決める際、誰が権力を握っているか
- ・親に逆らったことがあるか
- ・祖父母と同居しているか
- ・親族との付き合いは活発か
- ・今までどのような習い事をしたことがあるか
- ・親に「男の子なんだから」「女の子なんだから」と言われたことがあるか

##### 将来について

- ・将来、どのような職業に就きたいと思っているか
- ・理想とする仕事にとって、重要な条件は何か
- ・自分の卒業後を考える時、親・友人・教師の意見はどの程度重視するか
- ・両親より高い地や名声を得たいか
- ・就職しても自分に合わなければ、辞めても構わないと思うか
- ・一つの会社で長く働きたいか、複数の会社を経験したいか
- ・(女子) 結婚後も仕事を続けるかどうか
- ・(男子) 結婚後、妻が働くことに対してどう思うか
- ・「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という意見に対してどう思うか
- ・将来は両親と同居したいと考えているか

## 同志社系列 4 高校の比較～違いは何によって生じるのか～

<前回までの指標>

- 権力格差大：部下が上司に依存しており、部下はこれを好むか拒否するかのどちらかである
- 権力格差小：部下と上司は相互依存関係にある
- 集団主義的：メンバー同士の結びつきが強い
- 個人主義的：個人と個人の結びつきは緩やか
- 女性らしい：社会生活の上で男女の性別役割が重なっている
- 男性らしい：社会生活の上で男女の性別役割がはっきり分かれている

◎質問項目◎

### 権力格差

- ・親を尊敬しているか
- ・親に対して敬語で話しているか
- ・親のことを何と呼んでいるか
- ・家族で物事を決める際、親が決めるか、話し合いで決めるか
- ・家族の中で権力を握っているのは誰か
- ・親に逆らったことがあるか
- ・教師を尊敬していたか
- ・教師をあだ名で呼ぶことがあったか
- ・教師に敬語を使って話していたか
- ・教師と授業以外で話したことがあるか
- ・困ったことがあった際、教師に相談したことがあるか
- ・学校に好きな教師がいたか
- ・授業中、自由に発言することができたか
- ・物事を決める際、教師主導だったか、生徒主導だったか

### 集団主義・個人主義

- ・祖父母と同居しているか
- ・将来、自分の親と同居したいと思うか
- ・親戚との付き合いは活発か



- ・家族行事のために、自分の予定を変更したことがあるか
- ・学内の友人との交際は活発だったか
- ・学外の友人との交際は活発だったか
- ・グループで活動することが多かったか、個人で活動することが多かったか
- ・授業中、他の生徒の前で発言することに抵抗があったか
- ・教師が優秀な生徒を褒めることがよくあったか
- ・出た学校によって、人生がほとんど決まると思うか
- ・一度就職しても、合わなければ辞めても構わないと思うか
- ・一つの会社で長く働きたいか、複数の会社を経験したいか

### ジェンダー

- ・家庭内で、父親と母親の役割は異なっているか
- ・親に「男の子なんだから」「女の子なんだから」と叱られたことがあるか
- ・今までどのような習い事をしたことがあるか
- ・将来、どのような職業に就きたいと思っているか
- ・仕事において重要な条件は何か（給与・昇進・やりがい・作業環境・居住地など）
- ・（女子）結婚後も仕事を続けたいと考えているか  
（男子）結婚後、妻が仕事を持つことに対してどう思うか
- ・自分は女らしい（男らしい）と思うか
- ・性別によって、不利なことがあると思うか
- ・高校時代、物事を決める際に男女どちらが権力を握っていたか
- ・友人とケンカしたことがあるか
- ・友人と意見の対立があった際、どう解決したか

## 同志社系列4高校の比較～違いは何によって生じるのか～

<前回までの指標>

- 権力格差大：部下が上司に依存しており、部下はこれを好むか拒否するかのどちらかである
- 権力格差小：部下と上司は相互依存関係にある
- 集団主義的：メンバー同士の結びつきが強い
- 個人主義的：個人と個人の結びつきは緩やか
- 女性らしい：社会生活の上で男女の性別役割が重なっている
- 男性らしい：社会生活の上で男女の性別役割がはっきり分かれている

◎質問項目◎

### 権力格差

- ・親を尊敬しているか
- ・親に対して敬語で話しているか
- ・親のことを何と呼んでいるか
- ・家族で物事を決める際、親が決めるか、話し合いで決めるか
- ・家族の中で権力を握っているのは誰か
- ・親に逆らったことがあるか
- ・教師を尊敬していたか
- ・教師をあだ名で呼ぶことがあったか
- ・教師に敬語を使って話していたか
- ・教師と授業以外で話したことがあるか
- ・困ったことがあった際、教師に相談したことがあるか
- ・学校に好きな教師がいたか
- ・授業中、自由に発言することができたか
- ・物事を決める際、教師主導だったか、生徒主導だったか

### 集団主義・個人主義

- ・祖父母と同居しているか
- ・将来、自分の親と同居したいと思うか
- ・親戚との付き合いは活発か

立木ゼミ  
2009/10/15

19061018 伊藤 彩華

### 同志社系列 4 高校の比較～違いは何によって生じるのか～

<前回までの指標>

○権力格差大：部下が上司に依存しており、部下はこれを好むか拒否するかのどちらかである

権力格差小：部下と上司は相互依存関係にある

○集団主義的：メンバー同士の結びつきが強い

個人主義的：個人と個人の結びつきは緩やか

○女性らしい：社会生活の上で男女の性別役割が重なっている

男性らしい：社会生活の上で男女の性別役割がはっきり分かれている

◎質問項目◎

権力格差

- ・親を尊敬しているか
- ・親に対して敬語で話しているか
- ・親のことを何と呼んでいるか
- ・家族で物事を決める際、親が決めるか、話し合いで決めるか
- ・家族の中で権力を握っているのは誰か
- ・親に逆らったことがあるか
- ・教師を尊敬していたか
- ・教師をあだ名で呼ぶことがあったか
- ・教師に敬語を使って話していたか
- ・教師と授業以外で話したことがあるか
- ・困ったことがあった際、教師に相談したことがあるか
- ・学校に好きな教師がいたか
- ・授業中、自由に発言することができたか
- ・物事を決める際、教師主導だったか、生徒主導だったか

集団主義・個人主義

- ・祖父母と同居しているか
- ・将来、自分の親と同居したいと思うか
- ・親戚との付き合いは活発か

- ・家族行事のために、自分の予定を変更したことがあるか
- ・学内の友人との交際は活発だったか
- ・学外の友人との交際は活発だったか
- ・グループで活動することが多かったか、個人で活動することが多かったか
- ・授業中、他の生徒の前で発言することに抵抗があったか
- ・教師が優秀な生徒を褒めることがよくあったか
- ・出た学校によって、人生がほとんど決まると思うか
- ・一度就職しても、合わなければ辞めても構わないと思うか
- ・一つの会社で長く働きたいか、複数の会社を経験したいか

ジェンダー

- ・家庭内で、父親と母親の役割は異なっているか
- ・親に「男の子なんだから」「女の子なんだから」と叱られたことがあるか
- ・今までどのような習い事をしたことがあるか
- ・将来、どのような職業に就きたいと思っているか
- ・仕事において重要な条件は何か（給与・昇進・やりがい・作業環境・居住地など）
- ・(女子) 結婚後も仕事を続けたいと考えているか
- ・(男子) 結婚後、妻が仕事を持つことに対してどう思うか
- ・自分は女らしい(男らしい)と思うか
- ・性別によって、不利なことがあると思うか
- ・高校時代、物事を決める際に男女どちらが権力を握っていたか
- ・友人とケンカしたことがあるか
- ・友人と意見の対立があった際、どう解決したか

# 内部進学生の生活に関する調査

この調査は、同志社系列の4高校から進学された方々が、高校でどのような生活を送ってきたのか、また日頃どのようなことを考えて生活しているのかを調査するために行うものです。個人のプライバシーが表に出ることはありませんので、あなたが思う通りにそのままお答えください。

社会学部社会学科 立木ゼミ  
19061018 伊藤彩華

(1) はじめにあなたの出身校をお答えください。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 同志社高校 2. 同志社女子高校 3. 同志社国際高校 4. 同志社香里高校

(2) あなたの性別をお答えください。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 男 2. 女

(3) あなたの年齢をお答えください。枠内に数字を書いてください。

歳

(4) あなたの在籍している学部は次のうちどれですか。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 神学部 2. 文学部 3. 社会学部 4. 法学部 5. 経済学部 6. 商学部 7. 政策学部  
8. 文化情報学部 9. 理工学部 10. 生命医科学部 11. スポーツ健康科学部 12. 心理学部

(5) あなたの在籍している年次は次のうちどれですか。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 1回生 2. 2回生 3. 3回生 4. 4回生

(6) 次の事柄に関して、当てはまる番号に○をつけてください。

	あてはまる	どちらかといえば	どちらでもない	あてはまらない	あてはまらない
1. 教師のことは必ず「○○先生」と呼んでいた	1	2	3	4	5
2. 教師に対して敬語を使っていた	1	2	3	4	5
3. 教師と授業以外に話したことはない	1	2	3	4	5
4. 教師に相談にのってもらったことはない	1	2	3	4	5
5. 学校に、好きな教師はいなかった	1	2	3	4	5

あてはまらない  
どちらかといえば  
どちらでもない  
あてはまらない  
あてはまる

6. 教師のことを尊敬していた

7. 授業中、生徒が自由に発言することはできなかった

8. 学校で何か決める際、常に教師主導だった

9. 授業中、他の生徒の前で発言することに抵抗があった

10. 教師が、優秀な生徒を皆の前で褒めることがよくあった

11. 個人よりも、グループで行動することが多かった

12. 学内の友人との交際は活発だった

13. 学外の友人との交際は活発だった

14. 親に対して敬語を使っている

15. 親に逆らったことはない

16. 家族で何か決める際は、いつも決まった人の意見が通る

17. 悩みを家族に相談したことはない

18. 親のことを尊敬している

19. 現在、祖父母と同居している

20. 将来、自分の親と同居したいと思っている

21. 親戚との付き合いは活発だ

22. 家族行事のために、自分の予定を変更することがよくある

23. 出た学校によって、人生は大きく左右されると思う

24. 複数の会社より、生涯一つの会社に勤めたいと思う

25. 人から危害を与えられそうになった時、身を守るには、やはり男でないとだめだと思う

26. 大地震や火事などの緊急の時、その場を取り仕切るのは、やはり男でないとだめだと思う

27. 重いものを運んでもらう時、やはり男でないとだめだと思う

28. 自分が病気や介護を必要とする時、やはり女性に面倒見てもらいたいと思う

29. 健康や生活に関わる事柄に敏感なのは、やはり女性だと思う

30. 子供が病気などで苦しんでいる時、それを我がこととして感じ取れるのは、やはり母親だと思う

31. 生活者優先の政治を本心に押し進められるのは、やはり女性議員だと思う

32. 子どものちよつとした変化に気付くのは、やはり母親だと思う

ご協力、ありがとうございました。

# 内部進学生の生活に関する調査

この調査は、同志社系列の4高校から進学された方々が、高校でどの様な生活を送ってきたのか、また日頃どのようなことを考えて生活しているのかを調査するために行うものです。個人のプライバシーが表に出ることはありませんので、あなたが思う通りにそのままお答えください。

社会学部社会学科 立木ゼミ  
19061018 伊藤彩華

(1) はじめにあなたの出身校をお答えください。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 同志社高校 2. 同志社女子高校 3. 同志社国際高校 4. 同志社香里高校

(2) あなたの性別をお答えください。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 男 2. 女

(3) あなたの年齢をお答えください。枠内に数字を書いてください。

歳

(4) あなたの在籍している学部は次のうちどれですか。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 神学部 2. 文学部 3. 社会学部 4. 法学部 5. 経済学部 6. 商学部 7. 政策学部  
8. 文化情報学部 9. 理工学部 10. 生命医科学部 11. スポーツ健康科学部 12. 心理学部

(5) あなたの在籍している年次は次のうちどれですか。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 1回生 2. 2回生 3. 3回生 4. 4回生

(6) 次の事柄に関して、当てはまる番号に○をつけてください。

	あてはまる	どちらかといえば	どちらでもない	あてはまらない	あてはまらない
教師のことは必ず「○○先生」と呼んでいた	1	2	3	4	5
教師に対して敬語を使っていた	1	2	3	4	5
教師と、授業以外に話したことはない	1	2	3	4	5
教師に相談のつてもらったことはない	1	2	3	4	5
学校に、好きな教師はいなかった	1	2	3	4	5

教師のことを尊敬していた

授業中、生徒が自由に発言することはできなかった

学校で何か決める際、常に教師主導だった

授業中、他の生徒の前で発言することに抵抗があった

教師が、優秀な生徒を皆の前で褒めることがよくあった

個人よりも、グループで行動することが多かった

学内の友人との交際は活発だった

学外の友人との交際は活発だった

親に対して敬語を使っている

親に逆らったことはない

家族で何か決める際は、いつも決まった人の意見が通る

悩みを家族に相談することはない

親のことを尊敬している

現在、祖父母と同居している

将来、自分の親と同居したいと思っている

親戚との付き合いは活発だ

家族行事のために、自分の予定を変更することがよくある

出た学校によって、人生は大きく左右されると思う

複数の会社より、生涯一つの会社に勤めたいと思う

人から危害を与えられそうになった時、身を守るには、やはり男でないとダメだと思う

大地震や火事などの緊急の時、その場を取り仕切るのは、やはり男でないとダメだと思う

重いものを運んでもらう時、やはり男でないとダメだと思う

自分が病気や介護を必要とする時、やはり女性に面倒見てもらいたいと思う

健康や生活に関わる事柄に敏感なのは、やはり女性だと思う

子供が病気などで苦しんでいる時、それを我がこととして感じ取れるのは、やはり母親だと思う

生活者優先の政治を本当に押し進められるのは、やはり女性議員だと思う

子どものちよつとした変化に気付くのは、やはり母親だと思う

	あてはまる	どちらかといえば	どちらでもない	あてはまらない	あてはまらない
生活者優先の政治を本当に押し進められるのは、やはり女性議員だと思う	1	2	3	4	5
子どものちよつとした変化に気付くのは、やはり母親だと思う	1	2	3	4	5

# 内部進学生の生活に関する調査

この調査は、同志社系列の4高校から進学された方々が、高校でどのような生活を送ってきたのか、また日頃どのようなことを考えて生活しているのかを調査するために行うものです。この調査で得られた回答は、卒業論文以外の目的で使用することはありません。個人のプライバシーが表に出ることはありませんので、思う通りにそのままお答えください。

社会学部社会学科 立木ゼミ

19061018 伊藤彩華

(1) はじめにあなたの出身校をお答えください。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 同志社高校    2. 同志社女子高校    3. 同志社国際高校    4. 同志社香里高校

(2) あなたの性別をお答えください。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 男    2. 女

(3) あなたの年齢をお答えください。枠内に数字を書いてください。

(        ) 歳

(4) あなたの在籍している学部は次のうちどれですか。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 神学部    2. 文学部    3. 社会学部    4. 法学部    5. 経済学部    6. 商学部    7. 政策学部  
8. 文化情報学部    9. 理工学部    10. 生命医科学部    11. スポーツ健康科学部    12. 心理学部

(5) あなたの在籍している年次は次のうちどれですか。当てはまる番号に○をつけてください。

1. 1回生    2. 2回生    3. 3回生    4. 4回生

(6) 次の事柄に関して、当てはまる番号に○をつけてください。

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらでもない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
1. 教師のことは必ず「〇〇先生」と呼んでいた	1	2	3	4	5
2. 教師に対して敬語を使っていた	1	2	3	4	5
3. 教師と授業以外に話したことはない	1	2	3	4	5
4. 教師に相談にのってもらったことはない	1	2	3	4	5
5. 学校に、好きな教師はいなかった	1	2	3	4	5
6. 教師のことを尊敬していた	1	2	3	4	5
7. 授業中、生徒が自由に発言することはできなかった	1	2	3	4	5
8. 学校で何か決める際、常に教師主導だった	1	2	3	4	5
9. 授業中、他の生徒の前で発言することに抵抗があった	1	2	3	4	5
10. 教師が、優秀な生徒を皆の前で褒めることがよくあった	1	2	3	4	5

	あてはまる	どちらかといえば あてはまる	どちらでもない	どちらかといえば あてはまらない	あてはまらない
11.個人よりも、グループで行動することが多かった	1	2	3	4	5
12.学内の友人との交際は活発だった	1	2	3	4	5
13.学外の友人との交際は活発だった	1	2	3	4	5
14.出た学校によって、人生は大きく左右されると思う	1	2	3	4	5
15.複数の会社より、生涯一つの会社に勤めたいと思う	1	2	3	4	5
16. 親に対して敬語を使っている	1	2	3	4	5
17. 親に逆らったことはない	1	2	3	4	5
18. 家族で何か決める際は、いつも決まった人の意見が通る	1	2	3	4	5
J. 悩みを家族に相談したことはない	1	2	3	4	5
20. 親のことを尊敬している	1	2	3	4	5
21. 現在、祖父母と同居している	1	2	3	4	5
22. 将来、自分の親と同居したいと思っている	1	2	3	4	5
23. 親戚との付き合いは活発だ	1	2	3	4	5
24. 家族行事のために、自分の予定を変更することがよくある	1	2	3	4	5
25.人から危害を与えられそうになった時、身を守るには、やはり男でないとだめだと思う	1	2	3	4	5
26.大地震や火事などの緊急の時、その場を取り仕切るのは、やはり男でないとだめだと思う	1	2	3	4	5
〽.重いものを運んでもらう時、やはり男でないとだめだと思う	1	2	3	4	5
28.自分が病気や介護を必要とする時、やはり女性に面倒見てもらいたいと思う	1	2	3	4	5
29.健康や生活に関わる事柄に敏感なのは、やはり女性だと思う	1	2	3	4	5
30.子供が病気などで苦しんでいる時、それを我がこととして感じ取れるのは、やはり母親だと思う	1	2	3	4	5
31.生活者優先の政治を本当に推し進められるのは、やはり女性議員だと思う	1	2	3	4	5
32.子どものちょっとした変化に気付くのは、やはり母親だと思う	1	2	3	4	5



ご協力ありがとうございました